



## 国営事業地区探訪

# 岩手山麓地区における戦後開拓を支えた命の水とも言える「岩洞用水」 その恩恵を次世代につなぐべく、基幹施設の更新、長寿命化に取り組む

盛岡市と滝沢市にまたがる本地区は、戦後の農地開拓と入植者の努力、そして北上総合開発計画に基づく岩洞ダムなどの水利施設の整備により、一大農業地域として発展してきた。現在、国営事業により、古くなった地上導水路を地中トンネル化するための工事が進められている。今回、本工事の責任者である東北農政局岩手山麓農業水利事業所の増尾学所長と岩田地崎建設株式会社の藤島哲也所長にお話を伺った。

※写真は現場で両者を撮影したもの。背景は導水路末端に位置する円筒分水工で、ダムからの用水はここで南北に分水され山麓一帯の農地を潤す。

「今日は、よろしくお願いたします。はじめに、増尾所長に、これまでの職歴や岩手山麓農業水利事業所に転勤された時の印象などをご紹介します。ただそればかりです。」

増尾所長 東北農政局管内への赴任は今回で三回目になりますが、前は二年前、丁度東日本大震災の頃です。全局あげて農地や農業用施設の災害応急対応などに当たったことがつい先日のように思い起されます。今回、久しぶりに津波の被災現場などを見ると、当時の惨状が信じられないくらいに復旧し、さらに素晴らしく復興しているので、地域の皆さんの汗と涙、強い思いが詰まった姿なのだと感じています。

昨年四月にこちらに赴任した際は雪を頂いた岩手山をバックに小岩井の一本桜などを見物できるのかと楽しみにしてまいりました。しかし、実際には四月は冷気を含んだ強風が毎日のように山々から吹き降ろしており、初めてこちらに居住した私には桜を鑑賞する余裕がなく、エミリー・ブロンテの「嵐が丘」を思わせる自然の脅威のようなものに畏怖の念を感じました。自然が厳しいがゆえに、営農現場において、また、事業を進めていくうえでも色々と厳しい事情があるのだろうと想像し、この地域の農業農村のために役立てるよう頑張りねばと気を引き締めたところです。

次に、岩田地崎建設株の藤島所長、お願いたします。入社以来、農業農村整備事業も含めてこれまで、どのような工事現場を経験されましたか。また、この度、本導水路工事を担当することを知った時の感想や抱負をお聞かせ下さい。

藤島所長 平成九年に入社以来、東北支店に配属され、一般廃棄物埋立処分場の建設や宅地造成、

高速道路の建設に従事しました。東日本大震災の時は海外にいて漁業施設の工事に従事していましたが、帰国後は、復旧・復興工事で、防災集団移転促進事業や、三陸沿岸道路の建設に従事しました。農業農村整備事業の現場は、岩木川左岸（二期）農業水利事業と大崎農業水利事業に次いで三度目となります。

今回、導水路工事を担当することになった時には、地域の農業と日本の農業・食生活を支える重要な施設の整備工事であると知り、頑張ろうと思っていました。

### 戦後の開拓団が未開の山林原野を開墾

——では、最初に、増尾所長、今回探訪させていただく岩手山麓地区の歴史・自然・文化などについて紹介して下さい。

**増尾所長** 先ほどの復興のお話とも重なりますが、岩手山麓地区の歴史も、まさに厳しい自然条件に立ち向かった開拓入植者の皆さんによる汗と涙、強い思いの歴史といっても良いのではないのでしょうか。戦時下の食料難や戦後の食料増産・失業対策などもあって、緊急開拓が推進され、県内外からこの地に入植された方々が火山灰で覆われた未開の原野を、それこそ鍬一つで開墾して農地を拓いたという歴史があります。

もともと岩手は軍馬の育成から始まり南部馬という名馬の産地でしたが、開墾においても農耕馬の助けを借りて原生林の伐根などを進めたこともあり今も愛馬精神が強く、江戸時代から二〇〇年も続くチャグチャグ馬コ祭りも、馬への勤労感謝を込めて毎年六月に盛大に行われています。大名行列を思わせる鮮やかな衣装を纏った馬たちが鈴

の音を鳴らしながら街を練り歩くので、その音にちなみ「チャグチャグ」という名が付き、文化庁からは無形の民俗文化財に、さらに環境省からは「残したい日本の音風景一〇〇選」に選定されています。

それから、ダム貯水池の岩洞湖周辺は「本州で一番寒い場所」として知られており、マイナス三五度という記録があるそうです。七〇年も前によくもこの地にダムを造ろうと発想したものだと感じます。冬には広大な湖面が完全に凍りつくので、氷上ワカサギ釣りファンで賑わいます。この地域は旧玉山村に当たり、平成十八年に盛岡市に合併しましたが、玉山は日本を代表する詩人石川啄木のふるさととしても有名です。

——そういえば、ニューヨークタイムズ紙が選んだ「二〇二三年に行くべき世界の旅行先」で盛岡がロンドンについて二位に選ばれました。秋には鮭も遡上する美しい北上川、中津川、



開拓団の記念写真（「大地への刻印」より）

そして雫石川がこの地で合流し、盛岡城跡公園を始め緑も豊かです。古くからの城下町の風情も残されており、街なかにはコーヒーショップやジャズ喫茶、近くには温泉もあるのでゆっくりくつろげるところでもあります。

——岩手山麓の歴史を調べていたところ、「綾織越前広信」に辿り着きました。岩手県内で初めての農業用水路を開削したようですが、地域の水田農業の始まりについて紹介していただけませんか。

**増尾所長** ご指摘の越前広信が造った「越前堰」という水路は、一五七〇年代の安土桃山時代に開削が始まり、今も維持管理され大切に使われています。越前広信は雫石城に仕えていた際に城下の発展のため、この地に水を引き原野を切り開いて水田を整備しました。山麓を流れ出る沢水が雫石川に流れ込む前に、等高線に沿って横断水路を開削して少しずつ集水し、雫石川からの水が届かなかった山麓の地に水田農業を根付かせたのです。その後、南部藩の時代にも水田開発が奨励され、この越前堰を延伸させるなどにより雫石川左岸部に数百haもの水田を開発し、また、雫石川右岸部は鹿妻穴堰を新築するなどにより大規模な米作りが広がっていったようです。

一方、標高が高く、川からの引水が難しい山麓エリアには広大な農耕適地が未開発のまま残されていたことから、昭和に入りその開発可能性を探るようになっていきました。戦時下の非常時において、外地からの米の移入・輸入が厳しくなると、政府は昭和十六年に農地整備法を公布して農地開発営団による緊急開拓を開始します。ここ岩手山麓においても今の八幡平市の山後地区にて同営団が開墾を始め、これが旧国営大規模開墾事業の始

まりとされています。その後、戦況の悪化とともに事業もなかなか進まず、戦後、昭和二十二年に連合軍総司令部（GHQ）により同営団は廃止され、当時の農林省が事業を引き継ぎました。

戦後の緊急開拓事業においてこの地域の三〇もの集落に農地開拓団が入植し、厳しい自然や原野を相手に悪戦苦闘しました。開田するには大量の用水が必要ですので、やはり標高の高い山麓にどうやって引水するのが大きな課題でした。そこで、開拓団長としても地域の開拓に尽力し、旧滝沢村の村長にもなった柳村兼吉氏が岩手県とも相談して北上山中の標高七〇〇mの岩洞地区にダムを建設する案を提唱しました。ダムから農業用水を自然流下で山麓に引水し、その落差を利用して水力発電も行うという画期的な計画でした。同氏はこの構想の実現に向け私財を投げうって関係者に要請し続け、これがやがて北上特定地域総合開発計画へと結びつき、旧国営開拓建設事業の原形が固まったのです。

——本地区には、入植された皆さんが汗と泥にまみれ



建設当時の導水路（背景は岩手山）

て農地を開拓した歴史があることを知りました。このことに起因し、この地域には、どのような農業が展開してきたのでしょうか。

**増尾所長** 国営事業の地区内では岩洞用水を利用した水田において、「銀河のしずく」、「あきたこまち」、「ひとめぼれ」などの水稲が作付けされています。また、水田を畑利用し、大豆や小麦、そばなどの土地利用型作物のほか、ねぎやトマトなどの露地野菜を組み合わせた農業経営が行われています。果樹や園芸作物にも力を入れており、県内一の「滝沢スイカ」、特に最近はややグチャグチャ馬コ祭りに参加する馬の糞をたい肥にして栽培した「ちやぐちやぐスイカ」も売り出され、売り上げの一〇％は馬主に寄付をする取組も始まっています。さらに、岩手県が日本一の生産高となる「りんどう」なども特産品として有名です。

旧国営事業では牧草地も開拓整備しており、畜産業の発展にも一役買っています。また、明治時代から創業されている小岩井農場が地区に隣接しており、開拓で入植された方々に畜産営農を指導し生産物を買上げ、小岩井農場で開拓した農地の一部を周辺農家へ割譲するなど、地域に貢献されています。

この地域には開拓の記念碑があちらこちらに建立されているのですが、その碑文にはいずれも開拓時代の入植者の苦勞ぶりがつづられています。岩洞用水が農地に届き、水稲が作付けできたときの喜びなども記されています。私も開拓碑をいくつか訪れましたが、「拓魂祭」といったお祭りを続けている集落もあります。参加者にお話を伺ったところ、「碑文にもあるとおり、先祖は飲まず食わずの苦勞をしてきたが、岩洞用水には感謝し

ている。水は本当に大切なものなので是非とも次世代につなげて欲しい」といった要望が聞かれました。開拓された農地を守り、命の水でもある岩洞用水を大切に使う、この地の農業や畜産業を将来につなげていきたいという強い思いが伝わってきました。

## 発電との共同事業や導水路の地中埋設

——では、本題に入って行きたいと思います。現在の国営事業が始まった背景、事情、地元の声などについて聞かせて下さい。

**増尾所長** 現在進めている国営事業は半世紀以上も前に建設整備された旧国営開拓建設事業のうち、岩洞用水掛かりの用水施設を補修・改修するもので、盛岡市と滝沢市にまたがる面積一五七四haに及ぶ水田を受益対象としています。岩手県企業局の発電事業と共用している岩洞ダムや間接流域の取水・注水施設、上流導水路などは、旧事業同様に共同事業で実施しています。また、北上川横断サイホンから円筒分水工に至る下流導水路は現在地上部にありますが、その大半を地中トンネル化することも本事業の特徴の一つです。共同事業施設は県企業局が、また、農業専用施設は岩手山麓土地改良区がそれぞれ管理しており、管理労力の低減や自然災害へのレジリエンス強化などが求められています。今後とも長く安心して安全に利用できるように整備して、この地域の水田農業を引き続き支えることが我々の使命です。土地改良法上は施行令第四九条第一項四号の規定に基づき実施するもので、国営事業では末端支配面積五〇〇haまでを、その他の施設は県営事業で担当します。事業実施に際しては、平成二十年に盛岡市、滝



岩洞ダムと岩洞湖



北上川を横断する導水路

岩手山麓地区 事業概要

事業目的	用水改良
受益面積	水田 1,574ha (概要図着色部の内数)
事業工期	平成26～令和9年度(予定)
総事業費	17,500百万円(平成24年度単価)
改修施設	岩洞ダムほか関連施設、導水路、 南北主幹線用水路

—— 着工以来、この国営事業はどのように進捗してきているのですか。そして、残事業の実施方針を聞かせて下さい。

増尾所長 本事業は今年度でちょうど着工から一〇年目を迎え、あと五年ほどで完了させる予定

沢村と関係土地改良区からなる事業促進協議会が設立され、地元農家の意向を踏まえた事業着手に向けた要請活動が国や県に繰り返し実施されました。また、平成二十四年には越前堰、岩手山麓南部、玉山という三つの土地改良区が合併して岩手山麓土地改良区が設立され、地元の体制も整いました。ちなみに、旧滝沢村は日本一人口の多い村として有名でしたが平成二十六年から市制を施行し、まさにその年に事業着工となったわけです。

事業着工後は、地元の国営事業推進協議会が主体となって毎年要請活動が行われており、「本地区の農業が今後とも魅力ある産業として継続、発展し続けるよう、事業推進を図ること」を求められています。

今般の導水路工事は、今年度まで六年をかけて完成させた地中トンネルの新導水路を系統に連結させる工事です。この非かんがい期間中、つまり次の灌漑用水の供給が始まる四月までに完成

です。今年度末までに、事業費ベースで約七五%、四分の三の進捗を予定しており、事業の特徴としてご紹介した発電事業との共同事業も大詰めに入っていますし、導水路地中化工事もまさに今年度末までに完了させる予定です。残事業としては、岩洞ダムやその関連施設、北上川横断サイホン、円筒分水工などの改修、これまで使われてきて今回お役御免となる旧導水路の撤去といった工事がありませんが、関係者と協力調整しながら着実に完了に向けて進めて行く方針です。

—— この導水路工事の位置づけと発注者サイドとして工事発注において特に留意した点についてお伺いします。



させる必要があるという工程的にまさに待ったなしという厳しい制約のある内容です。この工事が三月に完成し、四月に通水する際に初めて地中トンネルを通じて受益地まで用水が届けられるということになるわけです。当然ながら、地元からも非常に注目されているところですし、我々として

も確実に完成させるといふ重い責任を背負っています。

このため、早期発注することによって余裕期間を設け、契約日から工事着手可能となる落水日まで約三か月間を確保して施工準備に当たることができるようになるなど、工程的にも無理のない設計としています。地元をはじめ他の関係機関とも十分に事前調整し、受発注者間では工事円滑化会議などを通じて施工計画をしっかりと議論するなど、予定どおり工事が進められるよう配慮しています。

——お待たせしました。藤島所長にお伺いします。受注された導水路工事の現場をご覧になった時の第一印象をお聞かせ下さい。

藤島所長 工事現場は滝沢駅からほど近い住宅地の中にあり、また、大学や中学校も近接していることから、近隣住民や通学の学生などにも十分配慮して工事を進めなければならないと認識しました。

——本工事に着手するに当たって、技術面あるいは環境面など具体的な工事の進め方についてお聞かせ下さい。

藤島所長 下流工区の既設水路解体箇所は、隣接する住宅地より高所に位置し、騒音振動や粉塵が拡散しやすい状況にあります。また、現場への進入路も通勤通学時には交通量の多い生活道路であるため、近隣住民の生活環境への配慮が課題と考えました。そこで、騒音振動対策として防音シートの追加設置や既設コンクリート破碎時の防振マットの設置を行い、クラウド型騒音振動自動監視システムと工事用車両運行支援システムによる監視を行います。さらに、生活道路に対する対策として大型車両の搬入は通勤時間帯を避けて行い、砂利舗装の工事用道路には粉塵防止材の散布や



本件工事現場(導水路を地下トンネルに接続)

ロードスweeperによる道路清掃を行い、冬期には環境にやさしい植物由来・非塩化物系凍結防止剤を使って路面の凍結を防止します。

まだ工事は始まったばかりですが、騒音振動や生活道路に対する対策に留意して工事を進めたいと考えています。

### 法面整形や掘削作業にICT施工を導入

——建設分野においても、生産性向上が大きなテーマになっています。岩手山麓の工事現場において、もし何か取り組まれるのであれば紹介したいだけないでしょうか。

藤島所長 本工事においては、下流工区管水路工の掘削や床掘といった土工作业でマシン・ガイド

ンスによるICT建設機械を使用します。本体に、人工衛星から信号を受信して受信地点の緯度、経度の情報に変換するための装置であるGNSS受信機を装着することにより、丁張りなしで設計データを基に法面整形や掘削などの施工が可能であり、施工精度の向上と生産性向上ができると考えています。

——建設会社各社がSDGsの目標達成に向けた多種多様な取り組みを始めています。岩田地崎建設は北海道で生まれ、昨年一〇〇周年を迎えられたとお聞きしました。大変おめでとうございます。新しいステージに立つに当たって、岩田地崎建設としてのSDGsの取り組みなど、御社の未来に向けた取り組みについて教えてください。

藤島所長 当社のミッション、つまり社会における存在意義として「安心で豊かな社会環境づくりに貢献する」ことを、ビジョン、つまり私たちの志し目指す姿として「人と自然の最適環境をつくる企業、地域から頼りにされる企業、個々の成長を促す企業」を掲げています。さらに、私たちが地域、社会、全てのステークホルダーから信頼される価値観として、社訓で「総親和・努力・誠実」を掲げています。当社は、CSR活動とともに、国際社会全体の開発目標として二〇一五年九月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」に記載された一七項目の「持続可能な開発目標」の実現に寄与する活動にも取り組んでいます。

ご指摘のとおり、当社は二〇二二年四月をもって創業一〇〇周年を迎えることができました。一〇〇年という節目を迎えた今、デジタルトラン

ソフトウェア・BIM/CIM等、生産性の向上を図るための積極的な取組やカーボンニュートラルへの取組が必要となっています。そして、それを牽引する人材の育成が必要であると考えています。このため当社では、若手社員の研修や資格取得支援に積極的に取り組んでいます。

——最後に、工事完了に向けて抱負や希望をお聞かせ下さい。

**藤島所長** 無事故・無災害で工事が完了できるように工事関係者一丸となって工事を進めてまいります。また、工事を進めていくうえで近隣住民のご理解とご協力を得ることが大切であると考えています。住民の方々への工事内容の丁寧な説明やコミュニケーションの充実をはかり、発注者とも連絡を取り合いながら工事を円滑に進めて行きたいと考えています。

### 受発注者間の緊密なコミュニケーション

——ありがとうございます。引き続き、安全第一で工事を進めて下さい。工事の円滑な進捗と無事の完成をお祈り申し上げます。

話題を変えまして、近年、大きな関心事になっています「働き方改革」についての取り組み、今後の方向性について教えて下さい。

**増尾所長** 受発注者双方ともに気持ちよく働くためには、緊密な双方向のコミュニケーションが非常に重要で、この点からも、工事情報共有システムを活用することは非常に有効だと思っています。時々、私も総括監督員として意見や質問を人力して差し戻したりしていますが、現場に向く時間が十分とれない場合でも、写真などの記録でその状況を把握することが出来、技術方向上にも役立つ

つと思います。使えるシステムはどんどん活用して最大限に業務効率化を図るようにすることです。所内でも推奨しています。

受発注者の関係では、各受注者の皆様のご協力を得ながら工事安全対策協議会を立ち上げ、現場安全パトロールと称して協議会会員皆で各現場を視察し、安全管理だけでなく、作業環境などについても意見交換しています。受注者間で良いところはどんどん共有することで、お互い切磋琢磨しながら働き方を改善していくことに役立ち、発注者の我々も色々学ぶことがあります。引き続き、双方向の円滑なコミュニケーションを心がけていきたいと考えています。

——藤島所長さんにも同じ質問になります。受注者の立場で取り組んでいることと今後の方向性について思うところを教えてください。

### PROFILE



ますお まなぶ  
**増尾 学** 所長

農林水産省 東北農政局  
岩手山麓農業水利事業所

昭和40年2月12日生まれ。昭和62年3月神戸大学農学部農業工学科卒業、同年4月農林水産省に入省。本省や各農政局で農業農村整備関連の業務を担当したほか、外務省、国際協力銀行、在ミャンマー日本大使館、国連食糧農業機関(FAO)、JICA(カンボジア水資源気象省派遣)などで国際関連業務にも従事。休日は、ゴルフや食べ歩き、囲碁やゲームなどを楽しむ。

### 終わりに

**藤島所長** 働き方の改革に伴う四週八閉所の推進、労働時間の短縮は全社的に取り組んでいる課題です。本・各支店に働き方改革委員が配置され、職員の増員や各支店での支援を行っています。工事現場では綿密な工程管理をし、発注者と密に連絡を取り合いながら円滑に工事を進めて行きたいと考えています。

発注者・受注者の双方の「働き方改革」が実現でき、働き甲斐のある職場になるように、また、事業が早期完了し、地域農業が振興されていくとともに、関係市の益々の発展に寄与していくことを願っています。本日は、長時間のインタビューありがとうございました。

### PROFILE



ふじしま てつや  
**藤島 哲也** 所長

岩田地崎建設株式会社  
岩手山麓導水路作業所

昭和49年6月15日生まれ。平成9年3月東北学院大学工学部土木工学科卒業、同年4月株式会社地崎工業に入社。東北支店に配属され、高速道路や宅地造成工事に従事。平成19年合併に伴い岩田地崎建設(株)東京支店に配属され、再開発事業や漁業施設の建設に従事。休日は、ドライブやグルメ巡りを楽しむ。